

錦心流琵琶演奏会

十二月五日(土)昼一時福井市民福祉会館、主催一水会福井支部、後援県邦楽連盟・福井新聞社・柴田勝家一河合港順▼本能寺一柳景城・内田景月▼羅生門一竹紋水▼鉢の木一野村燧水▼湖水乗切一名古屋長谷川秋楓▼井伊大老一滑川杉本和水▼白虎隊一松井記水▼新撰組一金沢村田知水▼茨木一岸本港水▼西川磯水▼天野屋利兵衛一會主内田景水▼(以下特別主演)大物の浦一金沢坂井旭蘭▼西郷隆盛一名古屋阿部秋子▼小栗栖の露一東京前田秋声。

水藤五朗氏入浴歓迎会

日本主同志会主催の恒例「日本の宴」に出演のため西下入浴の水藤五朗氏を迎えて十二月十一日(金)午後四時から平井春雄氏宅に田中敷水、梅原旭濤、矢吹旭美津、高橋正雄、植村真水の諸氏が出席、今は亡き錦襦衣史の追憶談や関東琵琶界の現状を聴いたりその外芸談雑談に一刻を過ごしたあと金閣寺附近の料亭錦鶴に席を移してビールで歓迎の乾盃、食事を共にして記念撮影で散会した。尚翌々十三日京都都会館に於て開催された邦楽各界一流揃いの「日本の宴」に五朗氏の姪、万里子夫人と神戸滝沢花水女史の歌で「あゝ沖繩慰霊」を他の邦楽との合奏で好評を博した。

大阪天王寺吉祥院義士祭に琵琶献奏

十二月十四日朝十時から法要があり午後一

時から大阪琵琶同好会が献奏し四百五十余人の参拝者に喜ばれた。赤垣源蔵一島津、米原▼雪晴れ一朽木▼義士の討入一作花旭友▼義士の本懐一奥村旭美▼大石主税一辻旭城▼松の廊下一石橋旭嶺▼別れの盃一田中敷水。

山崎旭華女史テレビ放映

十二月三十一日午後六時四十五分NHK教育テレビ「上方芸能鑑賞会」で「茨木」を藤舎氏の笛伴奏で放映。外に狂言、地唄舞。

上原まり(旭艶)嬢テレビ放映

一月六日午後一時二十五分から二十分間「新春対談」ふるさとを語るの時間帯に書家の安東聖堂氏と対談、その間筑前琵琶で安東氏作の和歌などを演奏放映。

京都琵琶協会の新年宴会

一月九日(土)午後四時嵐山沿線の料亭鳥米。(次号詳報)

日本琵琶協会の関西支部の新年宴会

一月十五日(土)午後四時京都西大路駅前料亭京みやこ。(次号詳報)

日本琵琶協会の総会

一月十六日(土)午後一時日本食堂調理所会議室。(次号詳報)

柴田旭堂リサイクル

一月十七日(日)午後二時神戸文化ホール(有料)。(次号詳報)

日本琵琶協会の新春名流演奏会

一月二十三日(土)正午東京銀座ガスホール(有料)。(次号詳報)

昭和五十七年二月一日発行(非売品)  
編集者 植村 真水  
発行所 京 市 山 田 東 一 丁目 目 社 水  
〒565 千里台スカイハイビルB棟六一四番  
電話 〇六(八七五)〇三二六番

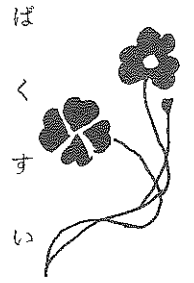
きがつあ  
元日晴れ、二日晴れ、三日晴れと暖かく長閑であつたお正月も夢の間に過ぎて世は早くも如月を迎える。昨年も暖冬、今年も暖冬でこのまゝ春が来れば誠に結構だが、本当の厳寒は二月から三月初めに掛けて訪れて来るのが常道だから油断は出来ない。それにしても北海道や東北地方などは今でも相当の積雪とテレビや新聞で報じているが、同地方在住の愛読者各位は特に御自愛下されたい。冬来たりなば春遠からじとは云うものゝ、あとしばらくは寒さと戦う覚悟が必要であらう。琵琶人の好きな曲目の統計(別項)をとるのに約一週間を費したが、結果的に見て男性の多い薩摩系と女性の多い筑前系の人々の好みが極く自然に数字の上に現われているのも面白い。

予 告

○浜松市音楽文化連盟音楽祭 二月六(土)、七(日)両日夕六時浜松市民会館、市教育委員会後援(有料)。琵琶部(邦楽部長小野鶴彦氏)は第一夜に花の白虎隊、決戦三方ヶ原外二曲を演奏。  
○京都琵琶協会二月定例会 二月七日(日)午後二時本部平井会長宅。

琵琶 機関紙 京 絃 第三三二号 京 絃 社

平家の栄華と都落(一)



平清盛は、増長のあまり後白河法皇を幽閉し、開白藤原基房を流罪に処し、高倉天皇もこれを歎かれて、僅か三歳の安德天皇に位を譲られた。

清盛の横柄を許さずこれを討伐せんと思ひ立たれたのは、法皇の第二皇子高倉宮以仁王(もちひとおう)で、参謀長として極秘のうちに計画を建てたのは源三位頼政であつた。

頼政は保元・平治の乱に平家と行動を共にしたので、源氏の中には頼政だけが残っていたが、平家の衆に引きかえ、頼政は誠にもつていたが、御所の中とは云うものゝ、只お庭先きに勤めているだけで、御殿の上に昇ることすら許されなかったのを悲しんで、人知れぬ 大内山の山守は

木隠れてのみ 月を見るかな  
の一首を詠んだ。これを聞かれた天皇は昇殿を許されたという。治承二年十二月、流石の

清盛も頼政の不遇に同情もし、おのれ一家の繁栄に気も咎め特に推薦して頼政を従三位に叙した。既に七十歳を越え病弱のためこのまま一生を終らせるのは気の毒だからと強く推薦したので、世間では非常に驚き「第一の珍事」と云つた程であつた。それもその筈、時の公卿、平家は清盛(六十一歳)前太政大臣、今は入道静海(じようかい)重盛(四十一歳)内大臣、宗盛(三十二歳)権大納言、時忠(四十九歳)権中納言、頼盛(四十六歳)権中納言、教盛(五十一歳)参議、経盛(五十五歳)正三位、知盛(二十七歳)従三位。

これだけ顔を揃えて居り、清和源氏は外に一人も居なかつた。頼政はその功績をいえば清盛に次ぐものであり、年令は清盛よりも十年以上の先輩である。平家でなければ人ではないとまで云われ、源氏は出世の出来ないものと思われていたのである。

頼政は感激、爾来源三位と呼ばれ、翌治承

三年十一月に出家して後は源三位入道と呼ばれた。四位と三位とは格段の違いがあり、頼政は一代の光栄として喜んだ。

ところが、意外な出来事が頼政の膺に玉(かんしゃくだま)を破裂させた。それは嫡子伊豆守仲綱が天下無双の名馬「木の下」を持っていたが、平宗盛がたびたび譲って欲しいと申し出たけれども、仲綱は、

恋しくば 来ても見よかし身にそふる  
かげをばいかが 放ちやるべき  
と云つてこれを断つた(かげとは、影と、鹿毛とをかけたもの)。父頼政は「それほど欲しいが物を惜しむべきでない」と、宗盛に譲るよう勧めたので、仲綱もあきらめてこの馬を宗盛に贈った。

ところが宗盛は、欲しいと云つた時に呉れなかつたのに腹を立て、馬の名を「仲綱」と変え、他人が名馬を見せてほしいと云えば「仲綱めに鞍を置いて引き出せ」といつける。当の仲綱は大いに憤慨、父頼政も、何條事のあるべきと思ひ悔いて、平家の人どもが斯様のしれ事をするにこそあるなれ、その儀ならば、命生きても何かせむ。と平家討伐の腹をきめ、高倉宮へ参り自ら参謀長となつて計画を進めたのである。

せた。義盛はそれまで紀伊の熊野新宮に居たので、この事内々にしていたに拘らず熊野に洩れた。熊野には三山(本宮、中宮、那智)に別れて居て、本宮の別当がこれを知り、平家と組して兵一千余人を率い新宮を攻める。新宮と那智が連合して二千余人が之を迎え戦い、本宮の兵敗れて退却、別当は飛脚を立てて京都六波羅に報告する。

(未完)



心理的効果を狙った

## 真田幸村の「抜穴」

辻 旭 城

慶長三年(一五九八)八月秀吉が京で世を去り、関ヶ原合戦のあと豊臣、徳川の地位がいかわり、遂に慶長十九年の大阪冬の陣、続いて翌元和元年の夏の陣の二度の戦で大阪城は灰燼に帰してしまつた。

夏の陣で「真田一族日本一の兵」と称された真田幸村の「判官びいき」的伝説は多い。徳川政権下の庶民たちは、幕府に対するせめてもの反抗として、子孫にこれらの伝説を語り継ぎ現在まで広めて来た。

その中で、幸村の神出鬼没な戦いぶりに、筆者は関係のありそうな「抜穴」について余暇を利用して現場に足を運び、調査と史料をもとに考察を試みた。「真田の抜穴」と講談等で見て来たような話を聴かされた戦前の子

供たちも、今ではその大半が攻城中に向つて掘つた心理的作戦で、もぐら戦術の穴であることを認めざるを得ないようである。

だが現存する穴の入口のある場所を考えると、必ずしもそうとは云えないようにも思われる。「もぐら戦術」即ち金堀り人足に穴を堀らせ、城の下まで行つてから爆破する戦法を、家康は佐渡代官間宮直元に命じている。

折から和睦の交渉が進められていて、城内の不安を掻きたてる心理的効果は大きかったに違いない。しかし四、五十間もの濠に巨石を積み重ねた石垣などの下を、本丸まで簡単に堀り進めると攻戦軍が思つていたとは考えられない。そしてこれらのトンネルが殆んど大阪城の南面にあったということも興味深い。

本丸から最も遠い攻め口でありながら、東の猫間川、平野川、北の天満川など、天然の要害に較べてやや手薄であつたからである。では現存するものを調べてみよう。

天王寺公園の北端に、冬の陣で家康、夏の陣で幸村が本陣を敷いていたといわれる茶臼山がある。山というよりも小高い丘で、かつては遠望が出来たという。この茶臼山から北へ約三百米ほど行くと、今は車の往来が激しい大道に面して左に「真田幸村戦没地」の碑があり、その前の石畳を行くとささやかな本殿だ。幸村が討死したといわれる境内の北の端は崖になっていて、この辺りに稲荷明神が祀られ、抜穴の入口はそこにある。

天王寺方面に向つては、人が這つて入れるほどの小さなもので、槍や刀を持つて武者が自由に出入する光景は到底想像できない。当時はもっと大きかつたとしても、一体この穴はどこに通じていたのであらうか。

ここから茶臼山までは指呼の間だから、当時の技術でも通じさせたであらう。だが冬の陣でこの辺りは家康本陣の直前であり、精銳を誇る伊達、藤堂の軍の後ろになるから、城方の抜穴としては意味がない。また「もぐら戦術」を用いるにはあまりにも城から遠く、穴の入口は城とは反対に向かつて居る。

そうすると、これは夏の陣で堀られたもので戦術的意義も考えられず、野戦となつた夏の陣での効果は薄い。攻城軍のトンネルでもなく、城方の抜穴でもないとなると、現存するこの入口は何であらうか。

夏の陣で東軍先鋒の藤堂家に伝わる「元和先鋒録」に、幸村の最後の戦いぶりが記されていて、抜道のことにも触れている。「真田左衛門合戦の様子奇怪の説多く候。此日初は茶臼山へ出、夫より平野口において伏兵を引廻し、又岡山に出て戦ひ、後に天王寺裏において討死す。其往来抜道の跡只今に相残り候旨確かに書記候……」そしてこの後に、抜道とは誤りで、攻城軍が城に迫るために堀つた奇道であると述べている。更に夏の陣の天王寺表において「紀州殿裏切被致候」の流言が飛んで、関東勢の乱れる隙に乗じ幸村の一隊が家康の本陣に迫つたと記している。

結論として、抜穴そのものよりも、抜穴による奇襲や補給が、相手方に心理的影響を与えたことが数々の伝説を生んだようである。

## 五絃閑話

水 藤 五 朗



## 往 来 歳 々

今年こそは、戦前、戦後を経て近時に至る迄の、琵琶界の近代史を記しておきたいと思う。昨秋、十一月の辻靖剛翁の葬儀このかた、その感を一層深くした私である。

ドイツの哲学者は、「歴史を知ることとは、後ろを向いて未来を知ることである」と云っている。確かに、過去の経緯を知って、その中から良し悪しを学び、来たる時に悪しを犯すことなく対処し得たなら、正しく成功を収めることと思う。

その意味で、琵琶の盛衰を記しておくことは、その中から無数の教訓を得ることに通じ、今後、我々に直面している課題の解決にも役立つのではないだろうか。が、その歴史資料の多くは散逸し、又、生証人である多くの琵琶人はその教を減じているのが現実である。

この様な中であつて、昨年の夏より、私は記録収集に役立つ貴重な資料を借り受けることが出来た。それは、琵琶人の多くによつて読まれてきた種々の機関誌で、古くは戦前の「琵琶新聞」「水声」「琵琶道」、戦後は「絃」「芸の友」「春秋」「芸論」等々の発行物で

あつた。八束一峰氏、秋山錦賜氏、沢田良雄氏等から備り受け、提供されたりした貴重な資料で、つづさに過去の動勢を知ることが出来たことは、本当に天の恵みであつたと云える。

それ等の膨大な資料の中から、幾つかの歴史の示唆を酌み取つてゆく作業は、それなりに楽しく、有意義でもあつた。ここ暫らくはこの資料の整理が課題になるのであるが、本当の意味では、流派を超越した協力で、大きな観点からの歴史編集がなされなければと思う。

今日迄の久しい間、琵琶の低迷を嘆く声は続いてきた。しかしよくよく考えてみると、琵琶が隆盛を極めた大正年間とその前後、即ち、大きく見て三十年余りが琵琶の理解された月日であつて、それ以降、昭和五年頃よりは、大衆的支持はなく、戦後は、邦楽の中でも極少の部に甘んじてきたのが現実であつた。

さすれば、琵琶の低迷と云ふよりは、本質的に大衆の支持を得る性格の芸能ではないのだとの考えが生まれてくるのも、あながち否定し得ないのである。しかし、琵琶そのものの歴史をたどれば、平家琵琶、盲僧琵琶に見られる如く、大衆によつて支持愛好された一時期もあるのであるから、やはり、琵琶を、本質的に、大衆性のない芸能として見る事は出来ないものであつて、今日の琵琶の低迷を、琵琶そのものの芸能的宿命と断定せずに、やはり、その芸能を手がける人々の在り方に、何

## 寒 中 御 見 舞

錦 心 流 琵琶 輝 派

輝 水 会 本 部

輝

錦

凌

外 会 員 一 同

〒113 東京都文京区本郷五十二一三三号  
電話〇三(八一)七五七四番

か、時代や、社会に容認され得ない側面があるのだと考えなければならぬと云える。

この様な視点で、前述した多くの資料を通して見てみると、私なりに幾つかの示唆を得ることが出来た。

まず、琵琶界が、多くの人々の熱狂的とも思える努力に支えられ乍ら、伝統芸能としてそれなりの社会評価を得られぬまゝ、今日の状況に至つて、深刻な後継者不在の問題をかかえてしまったのは何故なのか、と云ふことである。更に云えば、琵琶界こそ、この問題についての対応がなされていなくて、事の複雑、深刻さを象徴している様に私は思えてならない。

この原因は、やはりプロの不在である。戦

前、戦後を通じて、琵琶界に何人の玄人、今日で云う、プロが存在したのであるうか。

戦後、琵琶界の現実を考えれば、琵琶のプロなど存在する道理はなかったのであるが、同じ苦難の道程を強いられていた能楽や、新内、又、琵琶と同様に、歴史語りの芸能である講談が、それなりにプロを守り、育て、きた事を思うと、琵琶界にプロが育ってこなかったことが悔いられるのである。厳密に云えば、琵琶界にも、自他共に許すプロの琵琶人は多くいたのである。その人々は名人であり大家であつたのだが、惜しむらくは、その人がこぞって、プロの世界、芸の場を作ることとはしなかった。ある意味では、その努力を怠っていたのであり、他面では、プロの自覚がなかったのでもある。

能の世界では、職分として厳しい修行と、階級があり、その結果として、観客に見せるための舞台がある。当然のこと乍ら、アマチュアの素人会とは区別されたものがある。他の芸能についても同じ様なことが云える。若し、琵琶界で、大衆の支持を目標として厳しい芸競いの場が常時、永続的に設けられてきていたならば、その厳しさにあてがれて若人が入門し、プロとして養育され社会に出てゆけたのではなかったのだろうか。プロの不在と云つたのは、決して先人がプロとしての立場でなかったとの意味ではなく、プロとしての活動の場を作らなかった。その点では、やはり、プロではなかったと云うことである。そして、真のプロの存在しなかったことと同時に、真のアマチュアも存在しなかったのである。

## おんなの都 (六)

落 合 一 誠

### 常盤 御前 (3)

保元の乱の真の演出者は藤原信西であつた。人一倍権勢欲の強い信西は、生涯の敵であつた藤原頼長を蹴落とさんために、天皇対上皇の争いを演出して、源平二氏の若手実力者を味方に抱き込んだ。それが、まんまと功を奏して、彼は勝利を握つた。だが、調子に乗りすぎて、随分敵を作つてしまった。その上、源氏の大將義朝の実父や実弟に対する余りにも過酷な処罰によって、遂に義朝を敵方へ追いやることとなった。そこで、同じく信西を憎んでいた藤原頼朝が、義朝と組んで乱を起した。これが平治の乱である。

しかも、清盛重盛の父子が熊野詣でに出掛けている留守をねらつて奇襲のため信西は、たまりもなく敗れ去つて遁走した宇治田原の山中に穴を堀つてその中に隠れ忍んでいた。自ら墓穴を堀るとは正にこのこと、竹筒を地上に突き出して僅かに呼吸していた信西は、忽ち見つかつて打ち首の刑に処せられた。ところが、一時の勝利におごつた信頼は自ら大臣の位について勝手な振舞をはじめた。

この時、義朝の長男源太義平は、望み通り恩賞を与えようという信頼の言葉に対して、国も官位もいらない、それよりもわれに軍勢を賜え、さすれば是より阿倍野へ赴いて、熊野から帰って来る清盛を討ち滅ぼして御覽にいれましようと言えた。

だが、長袖の公卿は、自分は何一つ手を汚そうとしなくせに、批評だけは人一倍手厳しく「何を云う、武者というものは血に狂つた狼のようなものじゃな」と、全く取り合おうとしなかった。そのため好機を逸して、清盛一行は都へ帰ることが出来た。

信頼は漸く手に入れた権勢に溺れて対策を講じようともせず、一方義朝は播磨守に任ぜられて氣をよくし、戦を忘れて常盤の館に入り浸つたままで、独り義平は氣をもんでいる。これ以上官位を望んで何になろう、私は現在の殿で十分と、女は常に男を手放すまいとする。

だが、主上がいづの間に六波羅にある清盛の邸へ渡られたと聞いて、義朝は仰天した。そして飛び立とうとする義朝に、からみついた常盤はさめざめと泣きながら、今若、乙若、牛若の三児の寝顔を眺めた。

元治元年十二月二十七日、戦い敗れた義朝軍は、降りしきる雪の野道を八瀬の里へ落ちのびようとしていた。そして全王丸に「紫野に廻つて常盤に、何れ東国に落ちのびたら迎えを遣わすから、それまで人目につかぬ所に忍んで待て。」と命じた。

そして、漸く近江路へ抜けた、ところが、東国へ行く途中、尾張の国で長田忠致の裏切りにより、あえない最期を遂げた。その頃常盤は、寒氣にふるえながら清水寺のお堂にこもって、ひたすら仏の加護を念じ続けていた。

然し義朝、義平共に死に、その上義朝の子供を見つけて殺してしまおうと、平家の武者たちが常盤の行方を血眼になって捜しているのと知つた常盤は、最早これまでと都を落ちのびることにした。

雪中、一足行つては立ち止まり、三足進んでは休みたがる乙若、今若の手を引いて、牛若をふところを抱きしめた常盤は、これより遠い大和の国宇陀郡へ落ち行かんとする。雪は深く、歩みは遅々として進まなかった。

## 琵琶 吟 二 題

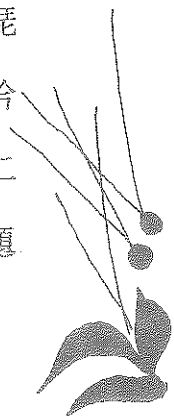
### 石 童 丸

(詩吟)

西を訪い東を訪ねて父を得ず  
夕陽山に沈みて已に蒼然

(和歌)

はるほろと鳴く山鳥の声聞けば  
父かと思ふ 母かと思ふ



(琵琶)

嗚呼父上に生き別れ 又母上に死に別れ  
天にも地にもたゞ一人 頼りとするは姉ばかり

(詩吟)

噫仏道はか恩愛非か  
熱淚滂沱として法衣に落つ  
忽ち聴く暮鐘無常の響き  
杜鵑一声血に啼いて飛ぶ

(演奏時間約八分)

### 勸 進 帳

(琵琶)

旅の衣はずかけの 旅の衣はずかけの  
露けき袖やしほらん 日もいつしかに越路の末  
帰洛をいつと定むべき それつらおもふるに  
落ちつき払つて読み上ぐる大胆不敵の武蔵坊

(詩吟)

朗々読み終る勸進帳  
君を打ち涙を呑む金剛の杖

(今様)

知るも知らぬも逢坂の  
霞につつむ旅ごろも  
露けき袖をしほらせて  
ここは安宅の関のうち

(詩吟)

誰か忠臣の心情に動かざる無し  
この状人をして長く忘れざらしむ

(和歌)

安宅なる関所の石は苔むして  
松の音高く語りつぐらん

(演奏時間約八分半)

## 好きな曲目あれこれ

編 集 部

昭和五十六年一月から十二月までの一年間に、各地から本紙に寄せられた演奏会プログラムや催しものなどで演奏されたものを拾い上げた琵琶の曲目を、薩摩琵琶(正派、錦心流、錦、鶴派、帝国派その他薩摩系の楽器で演奏)、筑前琵琶(旭会、橋会、翠流、水也田流その他筑前系の楽器で演奏)に分けて詳細に統計してみたが、予想通り、或いは予想に著るしく反した数字など興味深い結果が出た。最も数多く演奏された曲目から順次掲載してみよう。(括弧内の数字は一年間の演奏回数を示す。)

(註) 一 同じ趣旨のもので題名の違うもの、たとえば川中島Ⅱ霧の川中島、小曲川中島、千曲川、河川島などを含む。敦盛Ⅱ須磨の浦風などを含む。白虎隊Ⅱ小曲白虎隊、会津の稚児桜などを含む。八甲田山Ⅱ吹雪の敵、雪の進軍などを含む。以下同じ。

重ねて申し上げるが、この調査は昨年一年間に各地から本紙に寄せられたものの数字で、これを以て全琵琶界の趨勢を律するのは勿論藥物であり、飽くまでも参考の一助と

御了承頂きたい。  
尚総括的に見て薩摩系に比し筑前系の数字が少くないのは、筑前系の催し物などを本紙に寄せられたのが少なかつた結果に因ると思われるので今後は精々御投稿をお願いする。

薩摩系

- (四二) 湖水乗切。
- (三六) 白虎隊。
- (二九) 城山。
- (二六) 敦盛。
- (二五) 川中島。
- (二四) 西郷隆盛。
- (二二) 本能寺。
- (二〇) 菅公。
- (一八) 龍の口、屋島の營。
- (一七) 井伊大老、鉢の木。
- (一六) 別れの盃。
- (一五) 茨木、八甲田山、月下の陣。
- (一四) 羅生門。
- (一三) 舟弁慶、紅葉狩、潯陽江、常盤御前、石重丸、乃木將軍。
- (一二) 彰義隊、小栗栖。
- (一一) 新撰組、重衡。
- (一〇) 異国の丘。
- (九) 俊寛。
- (八) 雪晴れ、河内の宿、常陸丸、巖流島。
- (七) 坂崎出羽守、戦艦大和、大楠公、五條橋。

筑前系

- (六) 木村重成。
- (五) 道成寺、盛綱先陣、吉野山懐古。
- (四) 伊豆の御難、接待、曲垣平九郎、姫ゆりの塔、勧進帳、桶狭間。
- (三) 恩讐の彼方へ、忠度、花紅葉、勿来の関、蓬萊山、壇の浦、実朝公、蝦蟇、秋海棠、大和懷古、青葉の笛。
- (二) 二十一曲(曲名省略)
- (一) 五十四曲(〃)
- (二〇) 衣川。
- (一九) 白虎隊。
- (一六) 大物の浦、秋風故郷の山。
- (一四) 伽羅の兜、羅生門。
- (一三) 扇の的、本能寺、小栗栖、二〇三高地。
- (一二) 若き敦盛、綱館(茨木)。
- (一一) 新撰組、湖水渡り、栗津の露。
- (一〇) 吉野山懐古、青葉の笛、坂崎出羽守。
- (九) 堅田落、壇の浦、未練西行、菊水の旗、北の庄。
- (八) 安宅、壺坂寺、関ヶ原、西郷隆盛、曲垣平九郎、岩壁の母。
- (七) 敦盛、鴨川の露、川中島、禪師と正宗。
- (六) 石重丸、義士の本懐、赤垣源蔵、天の羽衣。

京都本妙寺

義士祭琵琶献奏記



十二月十四日(例)。本妙寺内のお堂に安置します四十七士の面前、数多い遺墨展覧の中での奉納演奏は今年で三回目となった。  
一時半。義士木像に恭しく詣うてて香を焼く。平井会長はじめ、馬場、桜井、山岡の四名は平井夫人、荒木、伊達、山田氏たちの応援も加わって厳かに献奏す。  
1. 田村が邸馬場鴨水。辞世の歌に哀れを感じず。  
2. 赤垣源蔵一山岡旭清。堂々魅力ある演奏で源蔵の心情を表現す。  
3. 天野屋一平井春嶺。堂内に響き亘たり、聴衆に深い感銘を与えた。  
4. 義士討入り一桜井旭富。力量豊かにして



目のあたりに光景を展開す。  
安置お堂内にお上人さまに世話方さん達や多数の拝観者も見え、元禄義挙二百八十年の昔を偲ぶことが出来た。

拝観者の中には琵琶樂器、妙音に目を揮かす若人たちの姿も見受けられた。  
お座敷では次々と「おそば」が運ばれ、心静かに頂く。また本堂内紅白の幕の内では「お薄」のご馳走に心改まる。閑寂な寺内にふさわしい催しで賑わった。

日本琵琶樂協會  
関西支部懇親旅行記



三時半門前で記念撮影し、滞りなく参観奉納を終えることが出来た。

(五六・一一・一五 鴨水記)

旧臘十二月十八日午前八時三十分、大阪梅田発の中国高速バスに、日琵琶関西支部の山崎旭草、三浦蓮水、伊勢谷安江、川上琵琶、梅原旭濤、矢吹旭美津、平井春嶺夫妻の八名が乗車、中国縦貫道路の一路米子目指して出発した。途中二度停車。バスの点検有り、約三十分延着して国鉄米子駅前に到着。米子の田子旭園女史の出迎えを受け、駅前の食堂にて同女史より昼食を御馳走になった。午後三時食堂前より二台のハイヤーに分乗、福市考古資料館、錦公園、米子城跡、横子内親王陵、深田庭園等を観光、午後五時三十分、皆生温泉のつるや旅館に到着。早速温泉に浸り、午後七時より田子女史を交え、懇親の宴を張り歎を尽して午後九時三十分終宴。田子旭園女史は帰宅されたが、米子駅着以来終始我々に市内の観光案内をして下され、又名産のお土産を沢山各人に贈恵賜わり、心温まる御歓待に涙したのであった。

翌十九日は昨日に変わる雨風劇しい朝だった。

旅館のマイクロバスで米子駅まで送って頂いたが、この朝も田子旭園女史は雨を突いて午前十時五十分米子駅を出発するまでお見送りして下さい。お礼の言葉もなく、その御厚情に胸がまる思いだった。

午前十一時三十八分松江駅着。駅前のタクシー二台に分乗して、松江大橋を渡り、松江城、明々庵、武家屋敷、小泉八雲旧居、月照寺、八重垣神社、神魂神社、足立美術館等を観光して午後六時四十分出雲大社前の竹野屋旅館に到着。一風呂浴びて夕食膳につき、芸談や、故辻靖剛師の葬儀当日の模様を山崎支部長より聞き、又平井春嶺理事の師杉岳峰師の奇行振り等を同理事より興深く聴き、夜の更けるのも気付かず時を過し、午後十二時前寝に就いた。

二十日は午前九時過ぎより旅館を出て、今旅行一番の目的である出雲大社へ、降りみ、降らずみの中を玉砂利を踏みつゝ参拝した。さすが神々の故郷とて、その社殿さは得も言われず、神前に額き、昨日タクシ運転手より聞いた四拍手して拝した。両掌を四回合わすことは、しあわせ即ち幸に通ずる意のこと。午前十一時五十一分大社駅前に乗り、出雲市駅と岡山駅で乗換え、午後五時三十二分新大阪駅着。ここにて大阪グループと別れ午後五時五十三分京都駅着、京都グループは楽しかった旅行を振り返り、特に田子女史に感謝しつつ、次回を約して家路についた。

(いろは生)